

LEE BuI
OHMAKI Shinji
OZAWA Tsuyoshi
DEKI Yayoi
NAKAMURA Kimpei
FUJI Hiroshi

あなたが物語と出会う場所

コレクション展1

コレクション展1
あなたが物語と
出会う場所

2015年5月26日(火) →
2015年11月15日(日)

展覧会名	コレクション展1 あなたが物語と出会う場所
会 期	2015年5月26日(火) → 11月15日(日) 開場時間 / 10時~18時(金・土曜日は20時まで) 休 場 日 / 毎週月曜日(ただし7月20日、8月17日、9月21日、10月12日は開場)、7月21日、9月24日、10月13日
会 場	金沢21世紀美術館 展示室1-6
料 金	一般 360円(280円) / 大学生 280円(220円) / 小中高生 無料 / 65歳以上の方 280円 ※()内は団体料金(20名以上)及び前売りチケット料金
出品作家	イ・ブル、大巻伸嗣、小沢剛、できやよい、中村錦平、藤浩志
出品点数	13点
主 催	金沢21世紀美術館 [公益財団法人金沢芸術創造財団]
協 賛	あめの依屋、尾山神社、金沢神社、グリル オーツカ、西福寺、佛子園、蓮昌寺
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL076-220-2800

展覧会について

今回の「コレクション展1」のテーマは、「あなたが物語と出会う場所」。古くから人は様々な物語を作り出してきました。自然物や身の周りの道具、また人の生活や一生といった身近な存在、宗教、また宇宙や歴史といった我々を創りだした大きな時間や空間からもたくさんの物語が生まれています。美術もそれに寄り添い、たくさんの物語を作品として表現してきました。

この展覧会では、金沢21世紀美術館のコレクションを中心に13点の作品を紹介します。何かの物語が込められている作品が展示されている一方で、見る側が展示された作品やその置かれた空間から自分だけの物語を紡ぎだす場合もあります。自分の作る物語はそこにある作品に向き合うことで変化し、これまで自分ですら気づかなかった新たな思考へと繋がっていくことでしょう。

島々のように点在する七つの展示室(恒久展示 カプーア作 “L’Origine du monde”を含む)を巡りながら、作品と出会うことによって、自分のこころの中にどんな物語が生まれるのでしょうか。

関連プログラム

ギャラリートーク

[日時] 2014年6月13日(土) 14:00～(1時間程度)

[集合場所] 金沢21世紀美術館 レクチャーホール

[会場] 金沢21世紀美術館 展示室1-6

[担当キュレーター] 立松由美子

[料金] 無料(ただし、当日の本展の観覧券が必要)

※6月13日は美術奨励の日(金沢市民であることを証明できるものをご提示いただくとコレクション展は無料で観覧いただけます)

※都合により、イベントの内容を変更する場合があります。最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

出品作家・作品

画像1～6を広報用にご提供いたします。

ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。

Email: press@kanazawa21.jp

<使用条件>

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送り下さい。

※アーカイヴの為、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

以上、ご理解・ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

展示室1

できやよい
DEKI Yayoi



1.
《てんでんぼう》1997
© DEKI Yayoi
Photo: KIOKU Keizo

1977年大阪府生まれ、同地在住。初個展を開催した1999年、戸芸美術館での「日本ゼロ年」展に最年少で参加し、注目を集める。できやよいは、彼女だけが見ることが出来る「ななかむら」という世界を、現実世界のなかで絵画として描き出してきた。指の腹で押された無数の絵具が画面を隅々まで覆い、そのひとつひとつには、細筆で人間や動物の表情が描き加えられている。できは、「ななかむら」の住人たちの姿で画面を埋め尽くすのである。こうした手法から生まれる作品は、強迫観念的な異次元空間の様相を呈している。

大きな画面に描かれたひとつの顔は、よく見ると、膨大な数の小さな顔で構成されている。ひとつひとつの顔は、フィンガープリントによる輪郭と、細筆で描かれた顔のパーツから成っている。画面下方に描かれている人物は、制作当時、作家が憧れていたミュージシャンの顔がモデルとされる。その人物に対する執着と妄想が、溢れんばかりの色彩と隙間なく描き込まれたディテールから成る華麗なファンタジーとして表出している。指紋を押すという身体的な行為と緻密な細密画の手法、ミクロとマクロの世界が同居する画面構成が特徴的な作品である。「てんでんぼう」とは、できが「夢や幻で出会った何者か」であると云われ、その正体は分かっていない。

展示室2

藤浩志

FUJI Hiroshi



2.
《ハッピーパラダイズ》2015
作家蔵
© FUJI Hiroshi
Photo: KIOKU Keizo

1960年 鹿児島県生まれ。福岡県糸島市在住。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。パプアニューギニア国立芸術学校講師、都市計画事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。2002年、金沢21世紀美術館開館前のプレ・イベントで、「かえっこバザール」プロジェクトを金沢市立城北児童会館で開催。現在、NPO法人プラスアーツ副理事長。十和田市現代美術館長。秋田公立美術大学アーツ&ルーツ科教授。

《ハッピーパラダイズ》の空間は、大手ファーストフード・チェーンの子供向けのおまけを素材にしたインスタレーション作品である。2000年に福岡で誕生した「かえっこ」は、いらなくなったおもちゃを物々交換して「かえる」、つまり、不要品を循環させる仕組みを考案し、全国各地の公共施設、学校、商店街、商業施設など数千カ所の場所で地元の人々の手によって開催され続けている。「かえっこ」は、使わなくなったおもちゃをカエルポイント(世界共通のこども通貨)によって交換するルールで、子供たちの自発的で自由な活動を促し、地域ぐるみで楽しむことの出来るプログラムとして人気が高い。運営主体となる人たちの目的によって環境教育、防災教育、広報活動、学校教育、販売促進など様々なアブレーションを生み出し、様々な現場で利用され続けている。その各地の活動に伴って、最後まで物々交換されずに蓄積したおもちゃによって作られたのがこの作品である。《ハッピーパラダイズ》に使われたおもちゃは、大量に生産され消費されたもので、さらに「かえっこ」でも人気は低く新たな引き取り手も見つからず循環しない。作品タイトルが「Paradise(パラダイス)」ではなく、死を意味する英語のdieとかけあわされているのは、現代の消費社会を象徴する証拠品としての藤からのメッセージが込められているように読める。未来の人は、この証拠をどのように分析するだろうか。

展示室3

大巻伸嗣

OHMAKI Shinji



3.
《Echoes-Crystallization》2015
作家蔵
© OHMAKI Shinji
Photo: KIOKU Keizo

1971年岐阜県生まれ、東京都在住。東京藝術大学および同大学院で彫刻を学ぶ。大巻伸嗣は、物質や空間のあり方を真摯な態度で探る制作をし続けている。大巻によって変容した非日常空間は、観る人の心に響き、日々の暮らしの中で忘れ去られたものを思い起こさせる。

《Echoes-Crystallization》で、修正液に水晶の粉末を加えて描かれたモチーフは、日本の絶滅危惧種の花々と常緑の松の枝である。現世で花や葉は確かに目の前に存在し、光を求めて伸び、散るときが訪ればそのままに朽ちていく。《Echoes-Crystallization》の生命は、絶滅危惧種であることや枯れてしまう未来の運命から解き放たれて、結晶化した永遠の命を謳歌しているのである。松は私たちの中にある神聖な精神、絶滅危惧種の花は一代限りの私たちがはかない肉体と見れば、肉体と精神の接点(境界)をも表現している。能舞台の鏡板は、舞台先にある神仏の姿を現す依代の松が舞台の板に写しとられたものであるという説もあり、聖なるものが仮の姿で舞いおける影向(ようこう)を見てとることができる。また、松は他の植物を駆逐し、凌駕する力を持っており、新しい環境に耐えられない絶滅危惧種の花と松とが混在している状況は、現代社会における物事の移ろいやすさや存在の不安定さを映す鏡と見ることもできる。

展示室4

小沢剛

OZAWA Tsuyoshi



4.
《金沢七不思議》2008
© OZAWA Tsuyoshi
photo: KIOKU Keizo
courtesy: Ota Fine Arts, Tokyo,
Misa Shin Gallery

1965年東京都生まれ、埼玉県在住。主流と考えられている歴史や社会的制度を批評しながら、自分なりに再解釈して表現に繋げている。自分が訪れた場所の風景を手描きした地蔵とともに写真に収める《地蔵建立》(1988年-)や木製の牛乳箱を小さなギャラリーに見立て、中に作品を展示する《なすび画廊》(1993年-)など、世界各地を移動しながら、継続的にプロジェクトを行っている。極めて個人的な内的世界を表現するのが芸術であるという考えに挑み、他人に相談しながら作品を作ると言う《相談芸術大学》(1995年-)では、価値観も出自も文化的背景も異なる人々を等価に繋げる場を作り出した。

小沢剛がガイドブックやインターネットで探した金沢の観光名所と、人伝に聞いた金沢の不思議を探して歩き、その中から7つの不思議—芋掘り藤五郎、鏡石、ハントライズ、弥七の豆殻太鼓、七つ橋巡り、鉛買い幽霊、天狗伝説—を選び、《金沢七不思議》として作品にした。小沢の言う不思議とは「怪しさ」や「ありえなさ」というものより、金沢の街に暮らす人々に口伝えに語り継がれている、「知っておくべきもの」とか「見ておくべきもの」の意である。また、伝統として引き継がれているねぶたや博多人形といった、いわゆるハイ・アートと一線を画して語られる手仕事の手法を借り、何が美術なのかという、近代美術史以降の再解釈を見る者に投げかけている。

展示室5

中村錦平
NAKAMURA Kimpei



5.
《日本趣味解題—閉ジタ媚態、既ニシテ》2000
『東京焼き Anti-Virtual-Reality「触」と「筋」展
インスタレーションの一部
© NAKAMURA Kimpei
Photo: KIOKU Keizo

1935年石川県金沢市生まれ、東京都在住。一貫して陶表現を追究しながら、既成の価値体系に対する批評を展開する中村錦平は、小学校4年生当時に体験した第二次世界大戦敗戦が自分の批評精神の起点であるとする。1955年金沢美術工芸大学中退。割烹「中嶋」で北大路魯山人の器と料理について研究。1960年代、滞在したアメリカの現代陶芸の動向に影響を受ける。さらにその批評眼を、茶陶の窯元、中村梅山の長男という自身の境遇へも向け、88年「東京焼窯元」を名乗る。伝統的価値から切り離されたニュートラルな電気窯と市販の陶土による創造を謳い、93年には個展「東京焼・メタセラミックスで現在をさぐる」を実施。

中村錦平は、陶芸の領域を支える地場産業と密着した土や釉、窯、機能美といった伝統的な技と素材に纏わる価値観を疑い、否定する造形行為の中で、新たに浮き彫りになる日本の伝統的なものを「日本趣味」として捉え批評する。当館は、中村の仕事を代表する「日本趣味解題」シリーズの2点を所蔵している。岩のような塊を土台に、時に型作りによってリアルに、時に手捻りによってアルカイックに、石、木の枝、ホース等の様々なモチーフが投げ込まれ、盛りつけられたかのような風情を呈する異様なオブジェは、金や赤が刺激的に施され、「不慮デハナイ、不敬ナ不始末」、「閉ジタ媚態、既ニシテ」といった副題と相俟って扇動的でさえある。「日本趣味解題」シリーズは、1988年に自らの陶表現を「東京焼」と命名する契機となったことから、作家の表現活動の核を成すものである。

展示室6

イ・ブル
LEE Bul



6.
手前:《セイレーン》2000
中:《出現》2001
奥:《モンスター・ドローイング No.1-No.6》1998
© LEE Bul
Photo: KIOKU Keizo

1964年ヨンウォル(韓国)生まれ、ソウル在住。1980年代後半から作品発表を始める。身体的アイデンティティに関わるパフォーマンスから始まり、磁器、バルーン、生魚など様々な素材を横断的に用いた立体作品も発表してきた。美術史や神話上の伝統的な図像、大衆性のあるモチーフを、作家本人の個人的経験や想像といった多様な要素と織り交ぜることによって、文化や時代を超える新たな世界を創出している。また、ポリウレタンやステンレススチールといった現代的な素材も取り入れ、機械と有機体との融合を示すような作品を生み出している。

《セイレーン》はギリシャ神話に登場する上半身は女、下半身は鳥の姿をした海の精「セイレーン」を源泉とする作品。神話では、その美声で船乗りを魅了し、多くの船を難破させたとされる。イ・ブルは、この図像から出発し、全く新たなイメージを作り出す。アルミニウムの骨組みにポリウレタンを施し、エナメルでコーティングするという現代的な素材と技法を使い、複雑で有機的なフォルムを完成している。